



## 8、江戸時代の庶民（百姓）の生活

### (1)庶民の多くは百姓

江戸時代になり、関ヶ原の戦いで敗れた西軍に付いた多くの武士は職を失い各地に散って百姓になることになりました。日本国内で相当数の人が流動し、その結果農村人口は増加しました。そして平和の世の中となると、やむなくそ

の地に定住しました。

猿爪は旗本明智遠山領です。水上・大川は当初は小里領でしたが、小里氏に世継ぎなく断絶し 1623 年からは幕府直轄領（天領）となり笠松の代官の為政となります。

江戸初期の慶長郷帳（1613 年頃）によると、猿爪村 240 石、水上村 173 石・窯役銀 45 匁、大川村 176 石・窯役銀 30 匁とあります。水上・大川は農業のほかに窯業があり、窯焼きの権利を得、維持するために銀を納税していることが分かります。

江戸時代の陶地区は、水上・大川の窯業もやがて衰退し、ほぼ農業のみの生活が続きます。

村の大きさを知るため、前記の石数を周囲の村と比較してみると、現山岡町の馬場山田村 1,656 石、久保原村 540 石、上手向村 708 石、下手向村 383 石、現明智町の明智村 684 石、吉良見村 161 石、野志村 214 石、現串原町の串原村 1,028 石ですから、陶の三村は周囲と比較しても小さな、小さな山村であったことが分かります。この石数は明治の時代までほとんど変わることはありませんので、明治元年の猿爪村戸数 79 戸・人口 303 人、水上村 86 戸・人口 327 人、大川村 74 戸・人口 152 人は江戸初期の戸数・人口であったと考えても大きな差はないと考えられます。

### (2)村の形成

江戸の初期頃、猿爪に宝昌寺（1636 年）、水上に諏訪神社（1597 年再建の棟札あり）・浄円寺（1685 年）、大川に浅間神社（1625 年再建の棟札あり）・八王子神社（1701 年再建の棟札あり）と相次いで創建・再建（これより前に創建）されています。このことは、この頃に現在に通じるムラ（村）が形成され、村の象徴として神社仏閣が建立されたことを示

しています。（大川林昌寺（1490 年）、猿爪北野神社（現天神社 1547 年）は既に建立されていた。）

村には庄屋（名主）、組頭（年寄）、百姓代が村方三役としておかれ、慶安のお触書にあるように、質素儉約を旨に遊興を慎み、年貢完納（村の総額を庄屋が領主に収める）を強いられる厳しい生活をしていました。

### 村の象徴の建立時期

猿爪 北野神社(現天神社)1547年創建

猿爪 宝昌寺 1636年創建

水上 諏訪神社(現水上神社)1597年再建

水上 浄円寺1685年創建

大川 林昌寺1490年創建

大川 浅間神社 1625年再建

大川 八王子神社 1701年再建



## ①庚申講

庚申（かのえさる、こうしん）とは、60通りある組み合わせのうちの一つで、庚申の年・日は金気が天地に充満して、人の心が冷酷になりやすいとされた。そこで庚申の夜には謹慎して眠らずに過ごすという行いが始まった。守庚申である。やがて守庚申は、庚申待（こうしんまち）と名を変え、一般の夜待と同じように会食談義を行って徹宵する風習として伝わった。

守庚申の際の勤行や功德を説いた『庚申縁起』が僧侶の手で作られ、庚申信仰は仏教と結びついた。仏教と結びついた信仰では、諸仏が本尊視され始めることになり、行いを共にする「庚申講」が組織され、庚申待は「申待（さるまち）」となり、猿を共通項にした新たな信仰へと変化していったようである。

そして庚申講は、同志相寄って催す講となり、互助機関として機能したり、さらには村の常会として利用されたりすることもあったようである。



三猿と庚申さんの祠(大川にて)

前書きが長くなってしまいましたが、猿爪関屋の庚申さんは永井一族が、水上田尻の庚申

さんは加藤一族が、庚申の日（60日に一度）の夜に集まって会食し、親睦を計りながら一族の繁栄を祈願したものと思います。そして、庚申信仰と仏教の結びつきを証明するように、田尻庚申さんは十一面観音菩薩を本尊



田尻の庚申さん



猿爪関屋の庚申さん

とし、猿爪庚申さんは青面（しょうめん）金剛明王を本尊としている。

## ②念仏講

念仏講（ねんぶつこう）とは、日本の仏教において、在家信者が集い念仏を唱える講中を指す言葉である。忌日、盂蘭盆や春秋の彼岸などの行事の日にも執り行われる。現在行われている亡者の49日法要、初盆法要、一周忌法要などは念仏講の名残行事でしょう。

毎月の定められた日に行われる念仏は月並みと呼ばれていて、多くは14日（旧暦…太陰暦）



猿爪 観音堂



水上 不動庵

の夜に行われていた。これは、昔に公休日が1日と15日で、その前日にあたるから少々の夜更かしは許されたことと、14日（旧暦）はほぼ満月であつて、月夜で比較的明

るく集合に便利であつたからと言われています。他にも地藏菩薩・観音菩薩・不動明王などを祀る縁日に行われることもありました。その他、虫送り・風送りや、疫除け・雨乞い等の際にも行われることもありました。以上のような念仏講は、村落内の老人たちによる寄り合いとしての役割を果たしており、その宗教的役割のほか人々の意見交換の場、娯楽、親睦の場ともなっていた。

猿爪の阿弥陀堂（堂ヶ洞に創建され、その後天神社境内に移築、さらに宝昌寺境内に移築）水上の不動庵がこれにあつたと考えられます。

武田により焼失した吉祥院は、宝昌寺建立（1636年）以前のお寺であり、臨済宗（宝昌寺）に馴染めない人々が（天台宗、浄土宗）その跡地に小さなお堂を建て集い、念仏講をしていたかもしれません。その根拠は、最近まで、焼失後400年以上「吉祥院跡地」として近くの人により管理されていたからです。400年以上もの間、跡地管理されるとうことは何かがあつたと思われま

す。また、お堂はできなくても、石碑を建てたり、掛け絵を廻したりして村民相集う講が数多く行われていました。

### ③その他の講

庚申講、念仏講を例にあげましたが、他にも十五夜、十六夜、十九夜、二十二夜、二十三日などの特定の月齢の夜、「講中」と称する仲間が集まり、飲食を共にしたあと、経などを唱えて月を拝み、悪霊を追い払うという夜待ち行事もあつたようである。

この時代、幕府により百姓の集會はご法度でしたが、神仏信仰の講と称しての集いには年貢完納を条件に大目に見ていたようです。百姓の休日は、正月くらいのもんですから、人々の楽しみは夜に集い、少しばかりの会食をしながら親睦を深めるのが何よりの楽しみであつたのでしょう。

江戸中期に始まつた講の文化は、上記以外にも太子講（大工・鍛冶屋など職人が集う）御嶽講（基礎御嶽の神へ家内安全などを祈禱する）などへの広がりを見せながら昭和の時代まで続きました。明治・大正の頃が最も盛んだったかもしれませんが、この村にも少しばかりの



経済的余裕もでき、人々の関心が信仰に娯楽に向いたものと思います。信仰の薄れた現在では、多くの様々な娯楽があることもあり、ほとんど見ることはないと思いますが。

講に関連した言葉に「お日待ち」と「無尽（むじん）」があります。いずれも、この辺りではよく使う（若者は使わないかも？）が、他地区の人にはあまり通じない言葉です。「お日待ち」は、もともとは近隣の仲間が集まって特定の日徹夜してこもり明かし、日の出を拝む行事で、正月・5月・9月などに行われ、しだいに酒宴を伴うようになったもので、そのうち近隣が集う酒宴を「お日待ち」と言うようになったと考えられます。陶地区では9月の町内道直しの後の酒宴を「お日待ち」と呼んでいる。また、「無尽」は頼母子講が変形したもので、月1回程度、特定のメンバーが集まり、お金を融通し合い、その後食事や飲み会をすることから始まり、現在ではお金を融通し合うことは少なくなったが、グループの会合を無尽と呼んでいる。

#### <番外>

私が子供のころ、祖母たちが、数軒で庚申さんの掛け軸を持ち回りして、庚申の日には当番の家に集い、掛け軸の庚申さんに家内安全などを祈り、会食を共にするのがありました。我が家で庚申待ちがある時は、子供の私にもお菓子のお裾分けがあるから楽しい行事でありました。昭和の庚申講です。



#### (4)石仏からみる陶地区での講

猿爪関屋の庚申さん、大川田尻の庚申さんは前述いたしました。他にも陶地区での講を石造物（資料：陶町の石造物）から検証してみると

- ① 大川乱曾の六字名号塔「南無阿弥陀仏」に「享保17年（1732年）大川村念佛講中」の刻印が

見られる。大川村では、江戸中期に既に念仏講が開かれていたことを教えてください。



- ② 猿爪関屋の庚申堂前では、西国巡礼供養塔に「宝暦5年（1755年）西国巡礼講中」の刻印があります。同場所には他にも文政3年（1820年）と嘉永5年（1752年）の二つの西国巡礼供養塔があり、いずれにも講連中として永井、伊藤、中村など永井以外の複数の方の氏

名が刻印されています。特に文政3年の巡礼供養塔には実に24名もの氏名の刻印があります。この人数は、この時代の猿爪の推定戸数79戸（1戸には1人のみ講参加として）の3割にあたります。これは永井一族の庚申講が、やがて近所の人や、巡礼同調者を含めた西国巡礼講に発展的解消したことを物語っているのではないのでしょうか。

または、庚申講は引き続き行われていたが、庚申堂という場所をお借りして西国巡礼講が開催されていたということかもしれません。それにしても相当な参加率です。今の本町辺りの人々は参加しないと村八分にされそうな空気だったかもしれません。

- ③ 水上滝坂の行者様には「寛政9年（1797年）水上大川曾木村講中」の刻印があります。このことは三村に渡っての有志による行者講があり、役行者（えんのぎょうじゃ）を祀り健康祈願・病氣平癒・厄除け祈願などを行ったのでしよう。また、代表者を奈良県吉野の金峰山（きんぷせん）にある蔵王権現（ざおうごんげん）に



滝坂の行者様

参拝してもらった講だったかもしれません。なにせこの地は山間僻地ですから山岳信仰の土壌はあったと思われます。



東町の行者様と  
塞の神祠

- ④ 猿爪東町山中にも行者様があります。11人の記名刻印がありますから水上滝坂同様に講中の建立だと思えます。建立の時期は不明ですが、隣にある塞の神には享和3年（1803年）の刻印がありますからこの頃だったのではと思われます。

- ⑤ 水上神社に二十二夜の月待塔があります。

二十二夜待ちは女人講で7月22日の夜、病氣治癒や安産を願って2~3人が、月が出るのを座ることなく立ったままで待ったといわれています。

立ったままの月待ちは、この辺り（恵那周辺）の特徴のようです。

### (5)山論（やまろん）

山論とは、山林・原野など山に関する境口論のことです。

江戸時代も中頃になると、山林の利用については村落同士で共同利用を行う入会慣行が存在したことから、用益権（草は田畑の肥料に、木は燃料になる）をめぐり山論が発生した。



水上神社前の  
二十二夜の月待ち塔

